

この空間の中で神の現実が身を起こしていきます。

人間が神の現実を直接に感知するということ、そしてその結果、神の現実がその大いなる権能をもって人間を揺さぶり、その近さをもってその人を溺れさせるということも、ありえないことではありません。その場合は、その人は祈りのこの偉大にして親密なる秘密を経験していることになります。その人はこの秘密を畏敬のうちに受け止め、大切にすべきであります。けれども屢々、そののみかむしろ大抵の場合は、そうはならず、一切は静寂のままです。あの方が「ここに」おられると、祈っている人が自らに言っただけで聞かせたその神は暗闇の中に留まったまま黙しておられます。そして、その場合には、祈りは、信仰に担われて、この黙している暗闇の中へと入って行き、そこで頑張り抜かねばならないのです。

祈っている人は、心を統一しているなかで、「ここに神がおられる——そしてここにわたしもいる」と言います。このことを実際に実行しようとするとき、ひとつの極めて重要な意味状況をその人は覚えることになります。すなわち、その人は「ここに神がおられる」と「ここにわたしがいる」という二つの文章において「いる」という語が別々の意味を持っていることに気が付きます。いる——ある——存在する——おられるという語におけるこのような語義の相違ということは、自然の生命においても既に当っていることがあります。誰かが、「この部屋にあるのは——いるのは？」と尋ね、わたしが「真ん中にはテーブルがあり、窓のところにはバラが咲いていて、絨毯の上には犬が腹這いになってい、わたしの前には友人が立っている」と答えるとします——この

場合、わたしはこれら様々な事物や生き物全てについて、それらが部屋に存在する、と言ったことになります。

けれども、それらは同じ仕方で存在しているわけではありません。生きていて成長もする植物はテーブル以上のものですし、存在する仕方もテーブルとは別です。わたしを見知っていて私の呼び声に答える犬の存在はもう一段強烈ですし、存在する仕方も別の新たなものです。そして、認識し愛することのできる自由と尊厳を持っている人間の権能性はさらに強く、在り方もまた別の新たなものです。そして、人間たちは人間たちで、現にその場にいるという同じことにおいても別々の権能性と在り方を持つことがありうるのです。誰かが部屋に入ってきて、そこにいます。ただし、ただそれだけのことで、他の人がその人との関わりで何かしなければならずとしても、せいぜい、その人を迂回して通らねばならないということだけという存在の仕方もあります。別の人は、誰かがそこで話をしようとするかぎり、その人のことを考慮に入れざるをえないような仕方でそこにいるかもしれません。第三の人は、現にそこにいるというだけで、その場にいる人々の中心になっているかもしれません。この相違は、ここで言わんとしていることにわたしたちの注意を喚起するものです。神は、他の何物も、他の何びとも同じ仕方では存在していない或る仕方で現にここにおられるのです。

神が存在しておられるのは、ご自身のみ起因してであり、ご自身のみによつてです。ですから、神おひとりのみが本質に固着した仕方で、そして本来の意味で存在している方です。聖書はこのことを神は「主」であると説明するという仕方で表現しています。神は、権能を振るうため

の対象となる諸事物が存在することによって、初めて主となられるのではなく、神は自分で自身の主でいらっしゃる。まさに本質からして、主としての権能を持っておられ、君主として君臨しておられるのです。それに対して、わたしがいるのは、わたしに起因してでも、わたし自身によってでもなく、神によってです。わたしの本質に固着した仕方のおかげではなく、神の恩恵の故にです。本来の意味においてではなく、分け前に与かるという意味においてです。わたしの存在と、神の存在との間には、両者を繋ぐ「とーそして」は基本的には全く存在しません。「神とわたしがいる」という文章は意味をなさない文章なのです。わたしが本気でこの文章を堅持しつづけようとするなら、わたしは冒瀆を吐くことになるであまりましよう。わたしの存在するは、神の存在するに対しては、被造物の存在するが被造物仲間の存在するに對するとは別の關係にあります。すなわち、わたしは単に「あの方のみ前で」しか、そして「あの方によって」しか、存在していないのですから。

心の統一をちゃんと実行していくとき、徐々にその人はこの真理を覚っていくことになります。自分が「神の前に」いる——神の前においてしかないものではありませんが、神の前では実際にいる——ということが分かるとき、人は大切なことを学んだことになります。神の前にいるということは偉大なことなのです。驚愕させるようなことかもしれませんが、極めて幸せにしてくれることでもあります。そして、わたしたちが見ていくことになるように、祈りの根本行為のうちのひとつ、すなわち礼拝はこのことに答えるものなのです。

神の面輪

さて、心を統一した人間が向いている神、——人間が神のほうを向くことができること自体、そうできる可能性を神ご自身が人間に与えておられる故なのではありませんが——この神とは誰なのでしょう？ この神は、あらゆるところにそのものの糸が張りめぐらされているのに言葉で言い表すことはできないもの、現存在の秘密、世界の最も深いところにある根拠、その他、人がどのような言い方で表現しようとするにしても、あれほど屢々人の口に上るあのものであるだけではありません。このようなものも存在しています、そしてそれも神に属してはいます。ただ、それはいわばあの方の息遣いでしかありません。あの方がご自分の働きを世界に浸透させるための手段にしておられる微振動でしかありません。神ご自身はもっと偉大です。単に純粹な意味のみでも、単一のイデアのみでもなく、現実です。世界の深みや内奥、中心ないしは高みであるのみでなく、自分ご自身の中において一個の存在者なのです。単なる〔抽象的〕権能性などではなく、〔具体的に指すことのできる〕「あの方（＝彼）」なのであります。あらゆる啓示の始めにして終わりでもある啓示は、神があの方（＝ご自身であるとの証言の中にあります。ホレブ山（＝シナイ山）の上でご自身の使いの者にご自分のことを告げられたあの方と同じ、あの方ご自身である、との証言の中にあります。秘密に満ちた仕方で見えておられるあの方の名をこの使いの者が尋ねると、あの方は「わたしはわたしである、である」と答えられます（出三・一四）。あの厳粛な瞬間に、神は「権能ある者」、「義しき者」、「恵み深き者」といった称号は一切排除して、

あの方が実在しておられるその在り方に即した名乗り方をされます。すなわち、ご自身に起因し、ご自身の中に存在していて、自ら足りてい、ご自身の主であり、自由であって、ご自身に対してのみ責任を負っている者、と告げられるのです。ご自身に栄光を帰しているこの誇り高さこそが、あの方の本質なのです。

神はあの方Ⅱご自身、すなわちペルソナであります。しかも、最も権能あるペルソナ、最も高貴なペルソナ、最も純粋なペルソナであるのみではなく、一切の修飾限定語を拒否するペルソナそのものであります。^(真実)

神の現実が話題になっていた際に、神の現実とは、有限な現実と一緒にひと括りにして同じ概念を用いて呼んではならない類いのものであると言っておきました。神は無条件かつ端的に存在しておられます。他方、人間が存在しているのは神によって、そして神の前においてのみでしかありません。あれに対応することがここでも当てはまります。すなわち、神は自分ご自身を通して、そして無条件かつ端的にペルソナです。他方、人間がペルソナであるのは、神がその人間に呼び掛けておられるあいだのみなのです。

或る人が自分の直接的な感情から極く自然に、「あの方〔Ⅱ彼〕は」——あるいは「あの方〔Ⅱ彼女〕は」——という言葉をおこなうのは、自分とは別人であり、しかも自分にとって最も大切であるとともに、自分と最も密接に結ばれてもいる人を指し、その人を念頭においてこの言葉を口にする時ではないでしょうか。ところで、或る人間が自己の人間存在の中心から、無条件かつ端的にあの方という言葉が発するとき、その瞬間にその人は、特に取りたてて神に思いを馳せて

いるわけでもないとしても、神を指し、神を念頭においてこの言葉を口にしてゐる筈なのです。つまり、或る人間が、あの最奥の深みの底から、広大な現存在の内奥に向けて「あなた」と呼び掛けるとき、そこで呼び掛けられてゐる相手は神である筈なのです。

祈りが向っているのはこの神です。この種の関係のための極めて美しい一表現が、「神の面輪」という言い方をする際の聖書にあります。

この表現は先ずはひとつの比喩を形成しています。というのは、わたしたちにあるような面輪は当然ながら神にはありませんから。なぜなら、神には身体がありませんから。「他方」ひとり人間のみは——ちなみに、人間の魂だけではなく、人間「の全体」が——神の似姿です。ですから、本質からして人間に固有であるものは、神についての知らせを含んでもいるもののなのです。人間にとって面輪の役割を果たしているものが、一切の人間の諸概念を超越する或る仕方においてはありますが、神においても存在しています。人間はその形態、姿かたちをもって諸事物の一員として空間の中に立っています。この形態とは、人間が物質と様々な力からなっている統一ある単位であることを、様々な事象と形からなる一個の秩序を形成していることを表現するものです。人間が何かを築き上げたり、自らを展開させたりすることができることを、闘ったり、征服したりすることができることを、権利と責任を持つてゐることを表現するものです。それに対して、「話している相手に真っ直ぐに向けられてゐるものとしての」「面」が意味しているのは、その人は自分の内奥の向きを決めることが、或る人間に注意を向けることができるということである

あり、好意をもって、あるいは敵意をもって、愛しつつ、あるいは憎みつつその人間の傍に
 ことができるということです。この側面は実に数多くの言い回しの中で表現されてきたこと
 といえば、「定めに額ひたいを供する」(「運命に敢然と立ち向かう」とか、「危険を直視する」とか、
 「誰かに微笑みかける」とか、その他この種の様々な言い方があります。面とは、ペルソナを、
 そしてペルソナの自由を表現するものです。と同時に、或るペルソナが自分のほうへ歩み寄っ
 てくる者を迎え入れていることを、別のペルソナの振る舞いを受けとめていることを表現するも
 のでもあります。この一切が、あらゆる表象を超える仕方でも神の中にも存在しているのです。

そこからたとえば、聖書は「神はその面輪おもてがわを人間の上に輝かせる」と言っています——ただし、
 面という形象を介しては、明るく広大であるという天のもう一つの形象が漏れ出てきています
 (詩三〇「三二」・一七)^(原注)。あるいは、神は不正をなす「者にその(怒りの)面輪を向けられる」
 ——ただし、ここではもう一つの形象、即ち、吹き募ってくる嵐の形象も滲み出ています(レビ
 一七・一〇)。あるいは、敬虔な人は「神の面輪の前に進み出る」(詩九九「一〇〇」・二)とも
 言っています。神の面の秘密が特に美しく表現されているのは、詩篇第二六においてであります。
 すなわち、「あなたは以前わたしたちに仰せになられたではありませんか、『わたしの面を求め探
 しなさい』と。おお主よ、あなたの面を今わたしは求め探しています。あなたの面をわたしの前
 から隠してしまわないでください! 怒りのうちにあなたの下僕を斥けることはなさらないでく
 ださい、あなたこそがわたしの助けなのです。わたしを押し退けないでください、わたしを置き

去りになさらないください、わたしの救いの神であられるあなた！ 父と母はわたしを置き去りにして行ってしまいました。けれども、おお主よ、あなたはわたしを迎え入れてください。」
(二六「二七」・八一〇)。

祈りに向けての第一歩は心の統一です。第二の歩みは神の現実を自分の前に現前させてみることであり、自分は創造されたものであるということを内的に実行してみることです。第三の歩みを形成しているのが、神の聖なる面輪を求め探すことです。祈っている人は、このようにしていくなかで、神が単に至高の君主としてのあなたであるのみでなく、その人にとっての、祈っているその人にとっての生けるあなたであることを覚ろうと努めるのです。神は、私を見知っていて、わたしを指し、わたしを念頭において声を掛けておられる方です。それも、単に無数の人間たちの中の一人としてだけではなく、わたしというペルソナが一人しか存在せず、かけがえのない存在であるが故にこそ、このわたし自身を指し、このわたし自身のことを念頭において声を掛けておられるのです。確かにわたしはあの方の前では無です。けれども、わたしに呼び掛けて、わたしがあの方とだけいるようになり、ご自分との或る間柄に入るようにと、わたしを引き寄せることが、あの方がなさろうと思われたことであつたのです。愛のこの秘密の中心をこそ祈りは向いているのです。

その人は「神の面輪を」——「神の心を」という言い方をしてもよいでしょうが、これはこれで新たな秘密になってしまふのかも知れませんが——求め探すように、との言葉が言わんとしてい

るのは、このことなので。こうすることは簡単なことではありません。わたしが祈りを開始するとき、わたしの前には周囲の様々な事物があります。わたしの中にあるのは、わたしの様々な思考と感情の滅茶苦茶な混乱か、そうでない時には殆どいつも、全くの空虚でしかありません。確かに信仰はわたしに、神は現にここにおられると言ってくれてはいます。けれども、神の存在についての明瞭な意識を持っていることなど、わたしには稀にしかありません。確かにあの方はあらゆるところにおられます。けれども、こういう表現法が許されるとするなら、あの方は必ず、わたしがいる側とは逆の側に、隠されている側におられます。そして、わたしといえば、あの方をそちらの側からいわば強引に連れ出してきて信じなければなりません。覆われている側、暗闇、空虚の中から、こちらに向けられているあの方の面を強引に引っ張り出してきて信じなければなりません。わたしと決めておられるあの方の心を求め探し出してきて、わたしの祈りをその中へと向けねばならないのです。わたしは語り掛けのための内的な関連付けを見出さねばなりません、その関連付けが失われて行く度に、改めて仕立て直さねばなりません——なぜなら、この関連付けが失われて行くということは常時起こっていることです。繰り返しいつも、祈りは単なる自己対話へと脱線して行きます。そればかりか、言葉の単なる空回りとなってしまうことすら稀ではありません。話しをいつも話し掛けとすること、自己対話を常にふたりの間の対話とすることが、祈りに向けての本来の準備であり、絶えず改めて実行していくべき修正でもあります。

神の面輪の前において初めて、人間は自分自身の本当の面輪をも受け取ることになります。人

間の面とわたしたちが名付けているものは、決して出来上がったものではありません。人間の面においても目に見える目鼻立ちなどはいわば一番外側の層でしかありません。外的な目鼻立ちから深層へと入っていくのです。すなわち、内的な形態、姿かたちへ、霊の刻印へと、心情の明晰性と断固たる堅固さへと、心の親密さへと。人間は普段は仮面ぐらいいしか着けていないのが普通です。面がどれほど生き生きしたものとなりうるかということは、たとえば、或る人間の心を捉えている会話の推移の中で、あるいは或る人に深い感動を与えている出会いの進行の中で、その人の本当の顔が突如として自己を覗かせ、今こそ初めて、その人の本当の顔が内側から出来上がってきているかのような印象を受ける際などに、経験することのできることです。このようなことはみな自然的な事柄であります。神的事柄を指し示しているものではありません。神の前において一人前に扱って貰えるだけの面輪を人間は自分からはまだ全く持っていません。そのような面はあの方の主導で初めて成立していくものなのです。あの方に話し掛けているなかで初めて、わたしはまともに或る何者かに——あの方がわたしを創造され救済された時に指し、念頭に置いておられたあのわたし——自身に——なっていくのです。この面は祈りの中で初めて、形成され、展開し、確固としたものになっていくのです。

外的な秩序

ここまでのところで話題になっていたのは、祈りの実践、練習ということでしたが、これを話